

## 四、日本における「個」の成立

### 一 てき屋・その棄民の系譜

つい数日前、森崎和江さん、筑豊の炭鉱長屋で二十年近く頑張り続けている人です。その森崎さんと、「常民と流民」というテーマで対談をした時、てき屋の話がさかんに話題になりました。

てき屋というのは、お祭りや縁日の時に店をはり、口八丁手八丁で売る大道商人がいますね。あれはやくざと違いますよ、みなさん。てき屋は物をちゃんと売る商人です。ただし、町場の商人から締め出されて店を張ることができない。定着できないために、祭りから祭りへ、催しから催しへと流浪しながら、商売をして歩くグループがてき屋集団です。これはもとはといえば、村から疎外された二男坊三男坊であり、あるいは自我が強いために追い出された疎外者であり、または前科者、流れ者といわれるような棄民、捨てられた民の一種です。そうはいつても、てき屋はあくまでも正

業ですよ、やくざと一緒にされては困るわけです。

そのとき屋の集団を追いかけて、ここ数年間というものの森崎さんは歩いている。この間も根室から帰って来た。この前東京へ来た時には、新潟のとき屋廻りの帰りだったと。私は、何であなたが筑豊に住みながら、とき屋に興味を持つのかと訊いたので。そしたら森崎さんには、「先生、民衆が個を持つということがどういふことかお分かりか」とこういふのです。「私は炭鉱でそれがあつた程度分かった。しかしまだ本当に分らない。私は炭鉱でつくづくそのことを考えた」といふ。まあ、炭鉱労働者のように、あれほど体を張って働いている人間はないですからね。だっていつガス突出が起こるか、爆発が起こるか分からないでしょ。これは森山さんの話を聞いた方がいいですよ。森山さんはもと炭鉱の生まれの人ですから。だから、森山さんの大砲を撃つように激しい講演というの、あの炭鉱の中から出てきたエネルギーだと思ふのですが、その炭鉱の労働者ほど何の救いもなく、常に生命の危険と個とが対決しているような労働の形態はないでしょう。それと漁民です。漁民も板子一枚下は死の世界です。いつも死と面接しているわけです。

その炭鉱労働者が坑山を離れたり、村に居られなくなつて、とき屋などに加わるわけです。そして非常に気風のいい人間として自立するわけですが、その際ほとんどが親分子分関係のようなどころを通過する。通過するというよりも、そこに直面して初めて自分というものが社会的「個」として位置付けられる、つまり一人前になる。親分子分関係などというと、みなさんはなんか個がなくなつて親分の下で奴隷がいるような、前近代的、封建的というふうにすぐ考えるかもしれませんが、

親分子分関係というのは馬鹿にはできませんよ、と彼女はいうわけです。炭鉱も中小の坑山の場合、ほとんど親分子分関係ですが、それをもっと徹底的に追い詰めるには、とき屋を調べる方がよく分かんと思つて、とき屋の話を聞き始めたと、彼女はもちろんでき屋の仲間には入れてもらえませんが、紹介をもらつたりしてずっと聞いて歩いてる。

もともと人間の共同体というのは、ご存知のように血縁共同体を基にして生まれました。その家族、親族、それが元になつて濃密な共同関係をつづけているうちに、他の血縁者と交わり合い、やがて地縁共同体を作りあげてきた。同じ場所と同じ自然の中で、あるいは同じ職種で生産や生活を共にし、運命を共にするというその地縁共同体（ムラ）の首根っ子にあるのが血縁共同体であるわけ。

ところが、とき屋は親分子分関係の中に入つて共同体を作るわけですが、彼らは血縁もなし、地縁もなし、それでは何があるのかといへば、一人ひとりの実力と結束した集団の力しかない。とき屋には二つの条件がある、ひとつは弁が立ち、頭の回転が速いこと。そして義理堅いこと。

民衆は自分を守る時、とりわけ権力に対して自分を守る時、いくつかの武器を用います。沈黙して相手を無視し逃げてしまふのが第一の武器、二つ目は弁舌でまくしたてるうちに相手を煙に巻いて逃げる、三番目は非常に頭の回転が速く、仲間を結束させて予防策をとる。第一の沈黙し、忍従していざとなつたら逃げるというのは、農民、常民型に多い。とき屋は違う。口八丁手八丁というのですか、とにかく新聞紙一枚あれば商売ができるというくらいですから。

みなさんもよく大道で、ステッキ一本持って二百人くらいの群衆の足を止めて、三十分も一時間も演説していられる野師を見るでしょう。僕はつくづくあの話術を研究したのですが、敬服しますね(笑)。あれ、いつてる事自体は無内容なんですよ(笑)。あの無内容な事で、何百人もの忙しい人をどうして三十分も一時間も、しかも非常に楽しませたりしながら足を引き止めることができるのか。それから、あの腐れバナナを見る見るうちに売りまくっていく、あのバナナの叩き売り(笑)。さらにのごぎり売りの目立て、あれなんか美的ですよ、おもしろいですよ聞いてみると。それだけで何か映画の一本ぐらい見たような充実感におそわれる(笑)。

そういうようなてき屋一人ひとりを見ていくと、抜群な個性、能力、その能力というのは頭の良さ、あれは民衆の知恵です、生活知といっても良いでしょう。それからあの能弁、表現力。常民というのは、あまり自分の事をよく喋らない、常民は自己表現がへたであるというのは柳田国男さんの説です。ところが、てき屋は自己表現力の鬼です。そのてき屋でさえ、ひとりでは生きられないというところに日本の歴史風土の特徴があるわけです。

## 二 「個」ゆえに

てき屋という能力を持った流れ者が、やはり社会の中で個として生きていくためには、親分子分関係、これはあえて私は擬制的、なといいますが、擬制的な親子関係の中に自分の身を定置すること

によって、初めてそこに個が確立するということ。いわゆる親子関係とか縦の支配というのは、この場合ひとつの擬制です。その擬制の中に身を置くことによってしか、個我を保障してもらう道がなかったということ。世間的にはまったく突き離され、疎外され、どこに行っても相手にされなかった、その一人ひとりの個性を生かす場合は、そういう場以外にどこにあるか、どこにあったか。もちろん、てき屋の話は戦前の話ですから、今はいろいろあります。しかしこれまでの流民にとつてどこにあるか。横浜寿町、東京の山谷、大阪の釜崎、そういう寄せ場に行くか、てき屋集団のような親分の傘下に入るしかなかったじゃないですか。もちろん、個の確立の保障と引き換えに親分に提供する従属の契約は、体を張っても守るべき「義理」となってその本人を縛ります。しかし、その契約は自然性的なもの、宿命的なものではないのですよ。本人が自分の意志で選んだ自縛であり自縛であつたわけです。

それで、そういうふうにして確立される民衆の個は、近代的な個ではないのですか。私は近代的な個の一種だと思いがね。人間として、あれほど自分の能力、個性を生かすものはないじゃないですか。丸山真男の言葉によれば、ええと何でしたっけ、丸山真男の言葉は非常に難しいから(笑)、近代的「個」とは「強靱な自己制御力をもった主体」である、というような規定をしたのがありますが、あの言葉をそっくりそのままてき屋の一人ひとりに適用してみてもあてはまるのですよ。私は丸山真男のお墨付きの近代的個ではないかと思うのですがね(笑)。

そうなつてきますと、親分子分関係というものを額面通り受け取ってはならない。てき屋たちの

あそこには血縁関係も地縁関係もない。そこに参加する時、指を詰めたり仁義を切ったりして形式はすこぶる古臭いが、彼らは一人ひとりそこへ進んで参加するという契約を選び取っているのです。自然的共同体からはじき出された人間が、温情的だったが苛酷な「ムラ」から離れて木枯紋次郎のように流れて流れ歩いていこうと、いよいよ食い詰め、親分の所へ頭を下げていって契約を結ぶ。その時に生活を保障され、そこで義理が生まれ、義理を尽くせば人情が生まれ、それによって世間からこれまで「やくざ者」「無宿渡世人」とののしられてきた人間も生きていける。こういうようになるのは悲しいというんですね。私も悲しいと思います。擬制であろうと何であろうと、とにかくそういうタテ序列の人間集団の中へ入らなければ生きていけないし、親方子方関係、しかも時には腕力で民衆を抑圧したり、丁々発止のたまし合いみたいな事をやらなければ生きていけないというのは悲しい。しかし、それは彼らの責任であろうか、彼らの責任じゃないですよ。労働もしないで食べているやつらの責任なんです。

そういうてき屋的な個を、私は何も日本人民の模範だなんていつてるのではありません。日本人の恥部だとか、封建制の一番の残りかすだなんていわれていられる集団の中にも、以上のように個と共同体との関係は貫徹されているのではないかといつているのです。

### 三 共同体からの個

私は秩父困民党において、小隊にひとつの共同体が編成される時、それは自然的な生活共同体がそのまま小隊になったのではないと。これはおそらく森山先生もおっしゃったと思う。そこには新しい指導者が選ばれ、その新しい指導者の元に血盟関係を結んで、そして自分の生活エゴからだけではなく、ひとつの理念を掲げて蹴起しているわけです。その時には、その先頭に立った人は、生きて再び帰らないという決意で出ている。だから坂本宗作のように戒名をはち巻きに書いて出ていく者、遺言を残していく者が出てくるわけです。そしてこういうのを見ていきますと、強靱な個というものが成立するための、その共同体の変革というのは、やはりそれぞれの歴史段階で幾たびも幾たびも繰り返され、個も共同体も互いに変革しあい、相互に強化しながら進んでいくというケースが多くあった。

すべての共同体がそうであったとは申しません。もしそうであったならば、とつくの昔に農民は今のような状態でなくなっているはずですが、しかし、そういう共同体の力が内在化していたということ、私は認めたいのです。しかしそれが多数にならず少数に止まり、そして追い詰められて、やがて歴史のひだの影に埋められていったのはなぜか。そこで出てくるのが、先程の巨大なナショナリズムの問題です。それではその巨大な上からのナショナリズムが、民衆を包み込んでいく過程を支えたのは何か。私は、もう時間がないから詳しく申せませんが、日本資本主義の進展であったと思います。資本主義が、日本の民衆の生活様式の中に深く深く食い込んでくる過程で、それは同時に進行したのだと思います。で、そのことを近代化と民衆の問題として、井出孫六さんがすでに

おっしゃられたと思いますが、そういう難問題を抱えながらも、明治時代の民衆の思想というものは、すばらしい輝きを見せたのであります。

## 五、現代の中の伝統

### 一 三里塚から

私は、あの三里塚の村とか、北富士の農村に、その輝きは今でも示されていると思うのです。三里塚は私の故郷がすぐそばなものですから、あの人たちとはよく話を通じ、何度も行っています。三里塚で今年の秋、おそらく大闘争が行なわれるでしょう。『妨碍』鉄塔と呼ばれる二基の巨大な鉄塔を、どうしても倒さなければ三里塚の空港は使えないわけですから。最後の決戦です。

みなさん、もう十年になりますよ、三里塚の闘いが始まって。逮捕者は延べ何百人も出ているのです。今でも十数人も青年行動隊が千葉の刑務所に入られています。裁判中でもあります。それだけの犠牲を払って、なぜ農民が国家権力を向こうにまわして十年も頑張るのです。なぜ土地を売ってどこかへ行かないのですか。今、一坪何万円もするし、膨大な金であれを買い取ってくれ

ると説得を続けられているのです。一町歩の土地を売れば、何千万円という収入が入る。それで動揺して、切り崩された農民もずいぶんおられます。ところがなぜ頑張り続けるのがまだ何部落もあるのか。今三里塚や芝山地区で頑張っている部落というのは、おおむね一千年ぐらいの歴史をもった古村なのです。古い村なのです。開拓村、非常に新しくつて三里塚の牧場を払い下げてもらつて開拓したような村は、いち早く解散してどこかへ引越してしまつた。そして転業した人は、今はもう借金だらけになり困っています。なにしろ空港が開かれないのですから、店を出したつて開店休業のまま八年もたっている。三年前に立派なホテルが完成した。しかし誰も泊まる客がいらないものだから、今ではラブホテルかなんかになっていますよ。みんな転業したつてだめだつた。小金の入つた家では息子はぐれてしまう。オートバイは乗り回すし、スポーツカーは買う。で、あつちこつちぶつけて自殺したり首吊りしたりする。そういう悲惨な事をいっぱい見えています。それを見れば見るほど、頑張つた農民はさらに土に生きようと決心を固めるのです。

つまり、一千年の伝統をもつた古村は、自分の村にあるこのひとくれの土、一本の木、これに何代も何代もの人びとの血と汗がにじんで、そしてこうなつたという実感の上に立っている。だから昨日や今日、その辺に来た開拓民とは違うのです。その愛着たるや、単なる銭勘定の問題ではないのです。

それからもうひとつは、その村の共同体は、空港の計画決定がなされた時、いち早く動揺し金で権力とくつ付いたような異分子を、村八分で叩き出してしまつた。最初に、金貸しの連中が追い出されました。今でも辺田という部落に行くと、二軒が空家のまま残っています。あれは何だと訊きますと、五、六年前に村八分にしたと。地主や金貸しで、まあその辺を不当に占領していたボスたちも、やはり叩き出されました。その次には共産党、どうして共産党が叩き出されたのかは分かりませんが(笑)、これもやはり内部分裂を計つたというので叩き出されたらしい。

それで、そういうふうにして残つた辺田部落は、新しい組制度、五人組のようなもの、みなさんのきらう封建時代の圧政の組織、その組制度を組織し復活して、組長を作つて、それが毎晩のように組の家を一軒一軒歩いて、家族のもめごとから、農作、生産状況の相談まで、いろいろな事を心配する。



Ⅲ-6 老人決死隊 (写真集『三里塚』新泉社より)

そして、少年行動隊から老人決死隊までいろいろな次元の行動隊が組織されましたが、その基盤になつたものは、少年行動隊の場合には地藏講であり、婦人行動隊の場合には子安講、嫁さん達の集まりです。老人行動隊の場合には念仏講である。そのほか、互いに金の貸し借りをしながら融通し合う、頼母子講があります。さらにその上に、結という共同労働の伝統組織が活用された。

なるほど三里塚は東京の近くですから、商業換金農

産物を作っていて、今までのような自然農業をやっているわけではありません。作った西瓜や落花生なんかをどしどし金に換えて売るわけです。だから小資本主義的、自家経営的な要素が強いのです。それにも関わらず、逃げ出していった連中の土地を管理して、結によって共同耕作し、そのあがりには闘争資金にまわしている。公団側は、無断耕作はけしからんと怒るわけですが、そんなことをいったって、畠を使わないで放置し雑草をはびこらしておいたら、それこそ害虫の発生源になるではないか、それをどうしてくれるというので、みんながかまわず耕作するわけ。

こういうふうにして、念仏講から頼母子講、子安講などさまざまな講が復活し、それはまた、老人決死隊、婦人行動隊、少年行動隊と重なって機能していく。しかも隣り近所は五人組によって緊密に結び付けられている。

農民は本質的に弱いのですから、弱くて、ずるくて、穴の中に入る性質を「個」としては持っているのですから自制しなくてはならぬ。それを百も承知しているのは彼ら自身なのです。彼らは、自分たちの弱点を百も承知しているからこそ共同体を作っている。弱くつてずるくつて、すぐ穴の中へ逃げ込む。妥協もし面従腹背もする。それを侮蔑しきつて我慢ができなくな



Ⅲ-7 闘う三里塚(写真集『三里塚』新泉社より)

ったやつがいる。それが木枯紋次郎などになって飛び出していくわけです。そしてそれが食えなくなったのが、てき屋や寿町に集まる。まあそれはどうか分かりませんが(笑)。そのような循環の構造がある。

それで、なおかつ資本主義の中でもみくちやにされて、たとえば腕が機械にはさまれてもがれた、足を怪我した、不治の病いになった、そういう人たちが、釜が崎、山谷、寿町という最底辺社会にはり付いた。このはり付いた人たちは、またそこでものすごく人間的な、あの共同体関係を再生して、互いを支え合って生きているわけです。

## 二 今一度の近代

それが、寿町でこの間小川伸介プロダクションが撮った『どっこい、人間節』という映画です。そこにもごとに、余計なものを失い尽した人間の優しさ美しさを描いています。ある人は足を切断した。ある人はもう絶対に治らないという水俣病みたいな業病を抱えている。だから、誰からも相手にされずにそこへ逃げ込んできた。ある人は暗い過去のため博打ばかりやって、どうにもならず体を壊してしまった、そういう人がたくさん集まって互いにあるものを分け合い、励まし合い、支え合いながら寿労働組合を作って生きていくわけです。これはもう立派な、てき屋とは少し違いますが、自由労働者の組織です。港湾労働者などもそこに多勢寄り集まって、それぞれの個を

生かし、それぞれが負ってきた「自分史」を大事にしていくのです。

そこで、三里塚のように既存の部落が持っていた、すでに滅びかかっていたような共同体関係、人間と人間とを無数の糸で繋ぎ止め、奴だこみたいに落ちないように吊し合っていたような共同体関係、組織の知恵というものは、場所を異にしても絶えず受け継がれ更新されていくものです。一人ひとり弱くてずるくて引込み思案でという農民ですから、だまつて放置しておいたら脱落するのは当たり前ではないですか。これを近代的個の解放と称して、丸山式に共同体を解体して抽出したら、これはもう権力どころか警察の姿を遠くに見ただけでも失神してしまう困った個になるでしょう。だから、こういう人に頑張ってもらうためには、もう一度その前近代的とかいう共同体に戻ってきてもらつて、念仏講やいろいろな講や結や組で仲間意識を昂めてもらう。そしてもう毎日のようにどこかの集会に出て、自分を他とできるだけ多くの糸で結ぶ。そうなれば弱気なんか吐けなくなる。初めはもうずつこけて落ちそうで失神しそうなやつが、こうして吊して戻らつて闘っているうちに強靱な主体になるというわけです。だから辺田部落みたいな所は脱落しなかったのだと思います。それに、俺の村は千年の伝統があつて、徳川幕府にも、今の皇室政府にも特別にお世話になつたことはないんだと。今の天皇にもあるいは三木内閣にもお世話になつたことはない、お世話ばっかりしてきた(笑)。だから空港の公益性がどうかこうとか余計な事はいわないでくれ、というわけですよ。

これは非常に筋の通つた議論じゃありませんか。

でそういうようなことがですね、古くはあの秩父事件、新しくは三里塚だとか富士周辺の村々に、はつきりと生きております。しかし何度も繰り返していいいますが、これが常に少数者であつた、そしてこれから先も少数かも知れないというところに、民衆思想最大の問題があるのです。非常にグルーミーな、非常に暗澹たる展望があるわけです。で、このグルーミーな暗澹たる展望、これに切り込んでいくのが、私たち研究者の任務だと思ふのです。どうしたらこれに切り込むことができるか。これはもう現代の問題ですので、みなさんの討論の中で、あるいはみなさんからのご意見を拝聴して、そのヒントを私たちに教えていただきたいと思ふのです。

大変、大学教授らしからぬ下賤な言葉や、あるいは大学教授らしからぬ不穏な煽動的な言葉も述べましたが(笑)、民衆の情念が乗り移つたものと思つて、どうかご寛容いただきたいと思ひます。終わります。

一九七五年十月二十日